

1980年12月4日

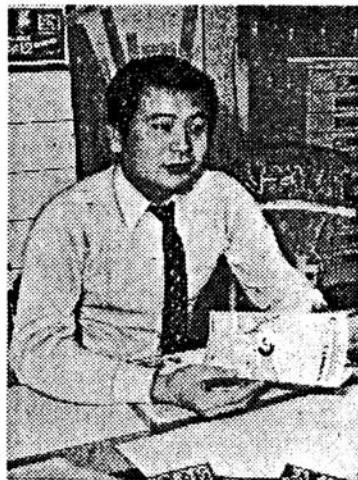
第34号

関学ジャーナル

発行所 関西学院大学
住所 〒662 兵庫県西宮市上ヶ原
編集 大学広報室

(本紙記事の無断転載を禁ず)

先輩訪問



専門情報誌で生涯教育への道案内をする

よねだ えい ち
米田 英 一 さん

学生の間でミニコミ誌やキャンパス新聞づくりが盛んになって久しい。「ファンシーノート」「キャンパスライナー」などなど……。ユニークな誌面は、いまでもキャンパスで人気があると聞く。

ところが、社会人で、情報誌(B5判)の発行に情熱を傾けるOBがいた。

米田英一さんは関西で専修、各種学校などの教室案内を掲載する専門誌「入学情報」(発行部数四万五千部)を手がけている。広告取り、編集など、一連の出版工程が二カ月のサイクルで忙しく回わってくる。彼はその編集責任を担当している。発行の目的は、「いま盛んに生涯教育が叫ばれており、こうした学校への需要が高まった。そんな折、正確な情報提供

で、自分のやりたい分野をまぢがいなく選択してもらおうと。

たしかに、働きながら語学、タイプ、簿記などを学ぶサラリーマンが多くなった。また文化教室へ通う主婦の姿もよく見かける。こうした生涯教育指向のなかで、関西には各種教室が二千校にもほるといふ。とりわけ女性の関心が高く、同誌の購読者の七割がやはり女性層だ。そのため、彼は女性向け雑誌「アンアン」「ノン」を欠かさず読み、編集の研究を続けている。

仕事はまず、朝九時から夜九時まで取材、広告取りに走りまわる。帰社して、すぐにスタッフとの編集会議が開かれる。締切り・出稿時には二晩、三晩と平気で徹夜が続り

かえられるという。

創刊号にこぎつけるまでが大変だった。発刊の趣意書を持って、各学校を訪問、理解と広告依頼を求めた。その数も一日二、三十校、延べ千五百校におよんだ。「そりゃあ始めはとも相手にしてくれなかった。なにせ、名もない会社だから……」としきりに「名もない」を発する米田さん。社会に出て、そのきびしさをいやというほど知らされた。だが創刊号を各学校に届けた時「ようやくおったなあ」といわれ、「思わず涙が出た」となつかしがる。

十九歳から父親の広告代理業を手伝い、夜学に通うかわらセールの歩いた。そして二十歳で本学に入學。興味のある広告研究会で真剣に理論と取り組んだ。お蔭で理論と実践が培われたという。

雑誌という一つの「作品」ができあがったとき、彼は「これが最高のもの」と、満足感にひたる。だが、二週間後には、その「作品」に満足できず「もっといいものを」と奮い立つ。いま広告掲載の倫理基準を独自に考えている。「教育内容の悪い学校は載せない。紙面でそれを読者に断りたい」と言い切る。そして、暮らしの中の学校案内版をめざし、実学に関する問題をどんどん編集ページで取り上げたいと夢は広がる。誠実さがセールスポイント。趣味は歴史小説を読むこと。26歳 経済学部卒業。